慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	産業予備軍と農民の都市流入
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.8 (1925. 8) ,p.1160(70)- 1183(93)
JaLC DOI	10.14991/001.19250801-0070
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250801-0070

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

産業豫備軍と農民の都市流入

小泉信三

（一）

勞働者の所得が纔かに其生活必需を滿たすに過ぎざるを常態とすることは容易に人の觀察し得る經驗的事實である。たゞ此事實の説明に至つては、諸家自らその所見を異にして居る。今日までに於ける最も有力なる一學説は此説明をマルサスの人口法則に求めた。勞働者の所得に餘裕ある時は其生活が安樂となつて人口從つて勞働の供給を增加せしめ、以て賃銀をして再び生活費と一致する水準まで下降せしめなければ已まぬと謂ふのである。Ricardo、Lassalle 及び其追從者の學説は即ち是れである。Adam Smith も亦たその勞働も亦他の貨物と同じく之に對する需要に適應せんとする傾向ありと謂ふ限りに於ては Ricardo 等の説と相通ずる所があるのである。併し乍ら予の再三論じたるが如く（拙著「經濟學説と社會思想」第三章、同「社會組織の經濟理論的批評」第一章財政經濟時報大正十一年十一月十五日十二月一日號參照）、勞働者の所得を人口原則の如き自然法則に由て説明する時は、結局其改善は人口制限によるの外不可能だといふ結論に到達しなければならぬ。これ社會主義者が極力マルサス人口原則の駁擊に努める所以であり、又社會主義者たる Lassalle が其運動の論據を賃銀鐵則に求めることの論理上許容し難き所以である。

（二）

Marx は固より充分這般の理を解するものである。彼れはマルサス人口原則を否定する。自然的人口原則は未だ人間の干渉せざる動植物界にのみ通用するもので、人間社會に於ては其歴史的各發達段階、即ち各生産方法は各々それに特有なる歴史的社會的人口法則を有するものだと主張したのである。そこで Marx は勞働の供給過多の原因を人口原則に求めないで、反對に「資本」に求めた。「人口過剰」は經濟學者の錯覺であつて、實は資本の蓄積が勞働を不用ならしめるのだと説いたのである。故に勞働供給の過剰は絶對的人口過剰でなくて、相對的人口過剰の

爲めに起るのである。その理は斯ういふ風に説かれて居る。資本の蓄積が同一有機的組成の儘で行はれる時、即ち資本が蓄積せられても、資本中の可變（賃銀として支出せらるゝ）部分と不變（機械器具原料建物等に投ぜらるゝ）部分との比例が變動せぬ場合には、勞働力に對する需要は資本蓄積の進行と共に增進し、從つて賃銀は騰貴する。併し賃銀の騰貴は利潤を削減するから、資本蓄積其者の勢は自ら阻止せられて、勞働者に對する需要も從つて減退し、賃銀は再び下降する。これが事の眞相を觀取する力なきものの目には人口の過剩として映ずるのである。

併し資本の蓄積が同一有機的組成の儘で行はれるといふ事は稀である。資本家は市場に於ける競爭に勝たんが爲め蓄積の進行と共に資本の有機的組成を改める。即ち機械原料等に投ずる不變部分を增加して、可變部分を相對的に減少せしめる。略言すれば、機械採用の爲めに勞働力が比較的不要となるのである。そこで勞働者は其の自ら造り出すところの資本の爲めに釋放（働き離）されるといふ結果になる。而して斯く釋放されて不要となつた勞働者が即ち産業豫備軍である。而して此豫備軍の背後に存するあるが爲め、産業現役軍の賃銀は此重錘に引かれて騰貴することが出來ぬ。即ち搾取が行はれ得るのである。抑も資本的生産方法の發生の爲めには先づ搾取せらるべき自由なる無資産勞働者がなくてはならぬ。これが資本主義の前提要件である。然し一度發生した資本主義が其存在を續け得る爲めには、勞働者階級を資本家の搾取に甘じなければならぬ境遇に抑置しなければならぬ。勞働者をして貯蓄によつて自ら生産用具を獲得し得るが如き程度の所得を享受せしめてはならぬのである。然らば此の如き條件を實現するものは何であるか。それは上記の産業豫備軍の法則、即ち資本的蓄積の法則である。

（三）

併し産業豫備軍の資本的生産方法に於ける意義は、たゞ是れのみに止まつては居らぬ。抑も Marx によれば、資本的生産方法は雇傭を得ざる勞働者と購入者を得ざる商品との産出に因つて必然的に崩壞すると謂ふのであるが、勞働者が雇傭を得ること能はずといふは、即ち産業豫備軍あることに外ならぬ。斯くして雇傭を得ざる勞働者の爲めに現に雇傭せらるゝものの賃銀は壓迫せられ、勞働者の貧

困屈從不安墮落は避くべからざることゝなり、彼等の資本家に對する憤恨を益々甚しからしめ、終に剰奪者の剰奪に到らしめなければ已まぬといふのである。

Marxの物の觀方は、畢竟現實にあるものは必ず滅ぶと謂ふに歸着する。而して今右に述ぶる所に由れば、資本主義を在らしむるものは、右記の資本的蓄積の法則であり、又資本主義を滅びしむるものも同じく資本的蓄積の法則である。此事は Marx 系統中に於て資本蓄積の法則が如何なる地位を占むるかを明にする。Oppenheimer が「Karl Marx の社會學説の大黒柱たり、その重要なる結論全體の最重要前提たるものは『資本的蓄積の法則である』」といふのは予の同意する所である（Das Grundgesetz der Marxschen Gesellschaftslehre Neudruck, 1919 S. 1）。資本家階級は今日政治的權力の保有者であるといふ。併し乍ら搾取は直接權力に依つて行はれ得るものではない。政治的權力は勞働者の暴動叛起を抑壓することは出來る。併し勞働者が生産手段を獲得して自ら獨立の生産者たらんとする場合には、政治的權力は決して之を妨げ得るものではない。勞働者が現在の如く勞働力賣却の境遇を脱却すること能はざるは、經濟上に於て勞働者の所得を大に其生活必要費額以上に騰貴せしめざる壓力が作用して居るからであつて、而して其壓力は Marx に從へば産業豫備軍が之を説明するのである。

（四）

此法則に Marx は夙くから着目して居つた。即ち一八四九年の其著「賃銀勞働と資本」の一節は説いて謂はく、資本が增加すれば、資本家間の競爭が激甚となる。此競爭に勝たうと思へば、商品を低廉に生産する方法を講じなくてはならぬ。其方法は分業と機械の採用改良とである。即ち資本の蓄積集中は必ず分業の進歩、新機械の採用、舊機械の改良を伴はざるを得ぬのである。其結果は何うなるか。分業は勞働者の生産力を增して、一人の勞働者をして能く五人十人二十人の仕事をなさしめる。即ち勞働者間の競爭は五倍十倍二十倍となるのである。又分業は特殊の熟練を不要ならしめて、勞働を簡單容易のものにする。即ち勞働が單調な厭ふべき作業となると同時に、又其競爭は益々激しくなるのである。それでは機械採用の方は何うかといふに、矢張同じ結果が更に大規模に現れて來るのである。

機械は不熟練勞働を、女子をして男子を、小兒をして成人を驅逐せしめる。機械が新たに採用せられたところでは、手工勞働者は多數一括して路頭に放出せられ、その改良完成せられた場合には、勞働者はより小規模に解傭せられる。資本家と資本家との戰爭には實に不思議な特色がある。戰鬪はよく勞働軍を徵募するものよりも、よく之を解傭する者の勝利に歸するのである。將軍即ち資本家は、互に誰れが最もよく産業兵士を解雇し得るかを競ふのである。之を要するに「生産資本が增加すればする程、分業と機械の應用とが進み、分業と機械の應用とが進めば進むほど、それ丈け勞働者の間に於ける競爭は擴大せられ、又それ丈け彼等の賃銀は收縮するのである」と（Kautsky-Ausgabe, 349）。

此觀察が遙に精緻複雜な形で說かれたのが資本論第一卷第二十三章に於ける資本的蓄積の法則である。

併し此觀察は全然 Marx 獨特のものではない。Ricardo が「原論」第三版に新に機械論一章を挿入して、機械採用の爲めに「勞働者に對する需要が……資本增加の比率に於てせず、其比率は必然減少する」ことを指摘するに至つたことは、予の嘗て詳論した所である（本誌第十五卷第十二號參照）。Ricardo は此の新見解を恐らく John Barton に學び得たるものならんと推測せられてゐるが、Marx は其「價値價格及び利潤」（一八六五年）の中で既に同趣旨の說を唱へたる人として、右二家の外猶ほ Sismondi, Richard Jones, Ramsey Cherbuliez の名を擧げて居る。而して手工業家內工業或は精々マヌファクツツルを觀察の的としてゐた Adam Smith が資本の增減は直ちに勞働需要の增減を決し、資本蓄積の不斷に進行する社會に於ては勞働者の狀態亦久しく良好なるべきことを論結したるに對し、宛も是等前代の工業形態より工場工業への轉移が行はれ、機械採用の爲めに職を失へる勞働者の頻りに工場を襲擊し機械を破壞した Luddites 騷擾を目前にしたる、一時代後の前揭諸家が遙に悲觀的斷案を下したのは異しむに足らぬ。而してこれは亦た當時の勞働者階級の對機械感情を反映するものであつた。Ricardo も言明した。勞働者階級が懷ける機械の使用は屢々彼等の利益を傷けるとの意見は「成心誤謬に基づけるものではなくて、よく經濟學の正しい原理に適へるものである」と。

（五）

Marx の法則は極めて簡略に謂へば、機械の爲め人間が無用となるといふに在る。而して此法則は素朴なる觀察者を首肯せしめ得るもの丶如くである。然らば機械の採用は何處に於て最も盛に行はれるかといふに、其の農業にあらずして工業なることは殆ど言を俟たざる所である。故に若し此の Marx の法則にして正しきものならば、産業豫備軍は都市に於て造り出され、更に其勢の甚しきに及んでは、都市より農村への人口逆流が行はれなくてはならぬ筈である。然し乍ら凡ての資本主義國に於て如何なる遲鈍の觀察者も決して看過し能はざることは、舊制度が崩壞し住居移轉の禁が解かれてより以來の滔々たる農民都市流入の大勢である。個々の工業に於て勞働者が機械の爲め排除せらるゝの事實は無論あるに相違ない。併し乍ら一方に於て排除せられた勞働者は、他方に於て他の職業に吸收せられてゐる。若しさうでなければ、全人口の增加よりも遙に速かなる都市人口の增加が繼續して行はれ得べき筈がないのである。

是に對して若し農業資本の組成變化、即ち農業上に於ける機械の採用が農民をして土地を離れて都市に流入せしめるのだと謂ふことが出來れば、資本的蓄積說は猶ほ之を救濟することが出來る。併し農業上に於ける機械の使用といふことは、資本論著作の當時に於ては縱令絕無ではない迄も、殆ど言ふに足らざるもので、工業上のそれとは無論比較にならぬ。今日迄の我國の如きに於ては、殊にさうである。農業資本の有機的組成も最近數十年間に無論多少變化はしてゐるに相違ない。然し乍らそれは重に人手を俟つて始めて利用せらるゝ農具又は肥料に投ぜらるゝ比例的出費額が增加したといふに止まつて、人手に代る、人手を排除する農耕機械の採用といふことは、少くも本土の農業に於いては絕無だといつても失當ではあるまい。それでゐて滔たる農民向都の勢は、何物も之を抑止することが出來ぬのである。此の顯著なる事實は Marx と正反對の結論に到達せしめなければならぬ。機械は勞働者を衝き離さずして之を吸收するのである。勿論都市勞働者の若干パセントが豫備役の狀態にあることは爭ふことが出來ぬ。然し一方に於て都市に流入せる絕大なる農民數を一顧すれば、何人も右の若干パセントを機械採用の罪に稼するの勇を有せぬであらう。若し産業豫備軍が「資本的蓄積」の爲めに造り出さるゝものならば、都市に於ける産業豫備軍の數は、少くも都市流

入人口を超過しなければならぬ筈である。而かも假りに獨逸の一例を引用するも、一八二〇年に於て獨逸全人口約二千四百五十萬中六百萬が都市、千八百五十萬が村落住民であつたものが、世界大戰前に於ては農村人口は千七百萬に減少し、商工業人口は五千萬に增加して居るといふ事實は、此點に關して全く疑問を挾む餘地を殘さぬのである。

予の見を以てすれば、此事實は資本的蓄積法則に對する根本的反證となり得るものである。而して予の知る限りに於ては此事實を指摘して Marx を覆へさんとしたのは Franz Oppenheimer を以て嚆矢とする。此攻擊の輕視すべからざることは既に批判力あるマルクシストも之を認めてゐる。「若し主要工業國に於けるが如く、工業人口が全人口よりも速かに增加して而かも失職者の百分率が高まることがなければ、彼の事實(産業豫備軍)に對する從來の、即ち失職者を絶へず新たに造出するものは『資本』であるとの說明は、之を維持することが出來ぬ」と Bernstein も言明して居るのである(Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus, Berlin 1901 S. 97)。

（六）

方今世界經濟學者中其所說の簡明にして而かも特色顯著なること Oppenheimer の如きは、蓋し稀有に屬するであらう。而して其の自說の眞なるを信ずること厚く、處女作以來其主張の殆ど變易するところなき趣きは、稍〻 Rodbertus がその Zur Erkenntnis 以來 Das Kapital に至るまで終始同一の說を反覆主張したのに比嚙を求めることが出來る。その Grossgrundeigentum und soziale Frage 1898 に於て、その國家論に於て、その Marx 論 Malthus 論 Ricardo 論に於て、その Wert und Kapitalprofit, 1916 に於て、その Sozialismus und soziale Frage 1913 に於て、Kapitalismus-Kommunismus-Wissenschaftlicher Sozialismus 1919 に於て、Theorie der reinen und politischen Oekonomie, 5. Aufl. 1924 に於て、後年の所說が多少精錬を加へてゐるといふ事の外、彼れが說く所は常に同一である。

大地主制度のある所には必ず農民の離村がある。農民離村の爲めに資本關係、即ち勞働力賣却の外に生活の途なき無産勞働者と資本家との對立が生じ、茲に始めて資本利潤といふ不勞所得が收得せらるゝことになる。これは完全なる双方的競爭の行はれぬところから生ずるのである。完全なる自由競爭の行はれるところでは、必ず等價物同志が相交換せられ、勞働者は皆なその産出價値全額を收得

する。Oppenheimer は此の完全なる競爭の復活に依つて資本主義を一掃せんと期するものである。併し若し大地主制度が自由競爭場に於ける勝敗の結果たるならば、自由競爭の復活は又早晩大地主制度をも復活せしめなければ已まぬ筈である。Oppenheimer が極力人に首肯せしめんと努めるのは、正に此の大地主制度なるものが、經濟的競爭の結果として生じたものではなくて、經濟外の政治的權力なる、謂はゞ deus ex machina に依つて造り出されたものなるの一事である。而して此大地主制度を崩壞せしむるにはたゞ僅に內地植民の一方法を以て足れりとする。農民自ら耕す爲めには充分の土地が存在する。而して農民にして若し自ら耕す丈けの土地を與へらるゝことを得ば、大地主制度は勞働力缺乏の爲めに之を維持することが不可能となり、同時に都市住民の農村還流が行はれて工業資本主義も亦維持せられ難くなる。「餘剩價値、即ち一切の不勞所得より救拔せられ、從つて階級なく、又從つて同胞友愛的に結合せられたる自由且つ平等なる人々の社會」は、一需要供給法則の作用により、斯の如き容易簡單なる方法を以て實現されるといふ。これが即ち彼れの主張する自由社會主義（der liberale Sozialismus）である。

「立法者にもせよ革命家にもせよ、平等と自由とを併せ約束するものは、空想家にあらずんば山師である」とは屢々引用せらるる Goethe の言である。「空想家」は勿論「山師」の評も亦たOppenheimer の敢て恐れざる所である。彼れは揚言して曰く、不平等も死を意味し、不自由も死を意味する。前者は資本主義之を示し、後者はボルシエヰズム之を示す。此の Skylla と Charybdis とに舟を觸れしめずして、讃へられたる自由と平等との國に到達するの法はたゞ我が自由社會主義、即ち內地植民の一途あるのみと（Kapitalismus-Kommunismus-Wissenschaftlicher Sozialismus, Vorwart）。

（七）

Oppenheimer の豫言者的情熱と小兒の如き樂天主義とは今茲に論ずることを要せぬ。予はたゞ此の情熱家樂天家の Marx に對する批評が頗る警拔なる着眼と强固なる證據に基づくものなることを指摘せんと欲するのである。Oppenheimer は產業豫備軍、即ち相對的過剩人口の事實を否認するものではなくて、Marx が下した、その發生增減の說明を否認するものである。Marx の誤謬は、Oppenheimer によれば、その土地中心的（agrozentrisch）觀察をなさずして、正統派諸學者と同じく工業中心

的觀察を下した所から起るのである。

Oppenheimerが資本的蓄積の法則に對する反證として先づ指摘するものは、上記の農民の都市流入の事實である。資本主義が多少の發達を遂げた處では、必ず「都市人口は全人口よりも遙に強く增加する。此事の原因は農村人口の大衆が都市に流入すること、及び舊時の農村が商工業地となること以外にはあり得べからざるものである」。ところで都市人口の大多數が雇傭せらるゝプロレタリエルから成立つて居ることは疑を容れぬから、都市の資本主義は決して勞働者を「釋放」せずして、却つて都市に於ける勞働需要は都市人口の自然的增加（出生による增加）よりも速かに增加することが確實である。さうすると産業豫備軍は何處から來るか。それが農村より來ることはMarxも之を認めて居る。たゞ彼れは農業資本主義の爲めに釋放せられた勞働者が都市に流入するものと解したのである。「資本的生産が農業を征服するや否や、若しくはそれが農業を征服したる程度に於て、此に活動する資本の蓄積と共に農業勞働者人口に對する需要は絶對的に減退して、而かも其反撥が農業以外の産業に於けるが如く、より大なる吸引に由て補はれるということがない。……此の相對的過剰人口の此泉源は絶えず流溢する。併し都市に向つてのその不斷の流溢は、田舍其者に於ける持續的潛在的なる人口過剰を前提し、而して此事の程度は排水渠が異常に廣い場合にのみ分明となる。故に農業勞働者は最低賃銀額に抑へ付けられ、常に隻脚を要救恤貧困の泥沼中に置くものである」（Kapital I, 607/8 vgl. 673, 675, 710）。

（八）

農民離村が農業資本主義の爲めだとすれば、産業豫備軍は資本主義之を造るとの命題が依然維持せられ得る譯である。Oppenheimer之を斥けて曰はく、

「苟も資本主義が僅にその最初の數歩をなりとも進めた所では、技術の進歩と共に資本の蓄積と集中との工業上に於て遙に速かに行はれることが農業上の比でないことは、何人も知る所である。

「されば若し益々增大する過剰人口の産出が、蓄積と其に伴ふ資本の有機的組成の變化に正比例して行はるゝこと蓄積法則の言明するが如くであつたならば、工業は其人數に比例して豫備軍の形成に寄與すること農業よりも遙に大でなくて

はならぬ筈である。

「何となれば、工業は個々の經營を以て成り、その個々經營は農業上の個々經營よりも平均上遙に高き生産階梯に在るのである。工業の總資本は農業の總資本を構成する個々の資本よりも蓄積と集中とに由て增大する程度が遙に甚しく、不變部分より成るところ遙に大にして、可變部分より成るところ遙に小なる個々の資本を以て成立つて居る。若しも勞働者の過剩化が眞に可變資本及び其相對的減退と何等かの關係を有するものならば、資本主義的發展の爾かく劣れる農業は、姑らく措いても、少くも全經濟が示してゐるところの現象を、大に著しき程度に於て工業は單獨にて示さなければならぬ筈である。然るにそれと反對に工業は農村過剩人口の頗る巨大なる部分を吸收して居る。又反對に農業は豫備軍の形成に寄與することが其人數に比して遙かに少なくなければならぬ筈である。然るに農業は極端なる悲觀論者に依て數へられる豫備軍の增加よりも年々十倍以上の人を釋放する。

「されば過剩人口の産出は資本蓄積に正比例して行はれずして、反比例して行はれることが明白である。

「而して此事は、予を以て見れば、蓄積法則に對する搖かすべからざる反證である。予はこれをそれと調和せしむべき可能性を認めず、又、Marx も、それを何處にも試みて居らぬ。

「農業上に於ては反撥のみが行はれて吸引が行はれぬといふ事實に會つて彼れが一度も停止しなかつたのは、彼れの絶對的工業中心主義よりしてのみ理解せらるゝことである。彼れに取つては農業は他の何れかのものと同樣に、全工業の一部門だつたのである。國民經濟の兩主要部門の存在條件が全然相反することは、彼れに充分知了せられてゐたが、肝要の考量に於ては、常にそれを忘れてゐたのである」。（Grundgesetz des Marxschen Gesellschaftslehre, S. 96 ff.）。

（九）

Oppenheimer は謂ふのに、元來農民離村の事實に對する説明は、二つしかあり得ない。Marx のやうに、資本主義的大經營が農民を驅逐するといふか、或は土地所有權の分配其者がそれを行ふといふかの何れかである。然し第一の説明は事實に反

して居る。農民は資本主義的大經營の行はれる地方よりも、幼稚なる小作小經營の行はれる地方から遙に多く流出するからである。愛蘭土が十九世紀中葉に於て其人口の殆ど半ばを失つたことはMarxも之を記して居る(Kapital I, S. 664, 670)。而して愛蘭土は貧困なる小作農の典型的鄕土である。又近時大衆移住の爲めに其人口の減少を來たさんとしてゐるのは、南部伊太利及びSiciliaである。而して此等は何れも資本主義發達が極めて幼稚で、巨大なる大地主制度の行はるゝ地方である。Marxは一八六一年に蒸汽機械及び運轉機を用ゐる農場に雇傭せらるゝ農業勞働者が千二百五人に過ぎなかつた事實を報じてゐる(Kapital I, S. 469/70)。而して自一八五一年至一八六一年に英蘭の都市に流入せる農村民は約六十萬であつた。

此事實は農民離村が農業資本主義の結果であるべき筈がないことを示して居るから、何うしても土地所有の分配が其原因でなくてはならぬとOppenheimerは論結する。一八七〇年代の始めにv. Goltzは「大所有地の程度と平行し、小作所有の程度と反對方向に移住(流出)は行はれる」ことを道破した。Oppenheimerの法則は此觀察を基礎とするのである。

大地主制度は何故に農民を驅逐して都市若しくは外國に流出せしめるか。之を說明するものは、彼れの所謂「一方的壓力減退の理法」(Theorie vom einseitig sinkenden Druck)である。此法則の與件たるものが三つある。自ら土地を所有せず、從つて勞働力實現に必要なる生産手段を缺きながら、政治上の自由、就中住居移轉の自由は之を享有する自由勞働者の大衆の存在することが其一、土地閉鎖に由て發生せる大地主制度が其二、人口增加が其三である。

さて人口が增加すれば、他の事情にして變らざる限り、社會的協業(Kooperation)が進歩するから、財の供給は豐富になる。自由競爭の行はれるところでは、此供給量の增加は均等に全人口に分配せられる。換言すれば、經濟的壓力(壓迫)は均等に減退する傾があるのである。但し工業上に於ては、收穫遞增法則、農業上には收穫遞減法則の作用があるから、此の壓力の均等減退が行はれる爲めには、農村增加人口の一部分が或は都市へ、或は經濟領域外に流出することは必要である。然るに大地主制度の存するところでは、田舍に於ける壓力の減退は地主の利益にのみ歸し

て、全人民は其惠澤に浴することが出來ぬ。農業プロレタリヤの所得は全然增減なしといふのではないが、兎に角此の社會的協業の進歩に基づく一般的壓力減退からは獨立して居る。「土地所有に從屬せる農業プロレタリヤは不變なる經濟的壓迫の下に立つ」のである。

然るに農村以外の地域では、人口の增加從つて協業の進歩と共に所得が增加する、即ち壓力が減退するから、農業プロレタリヤと都市入口との間に傾斜が生じ、流動が起る。都市に於て協業の行はれることが盛なれば盛なる程、都市に於ける壓力は減退する。而して農業勞働者は前提に由て住居移轉の自由を有するから、そこで病的なる法外なる人口の都市流入が起る。斯くして産業豫備軍が發生し、「斯くして實に資本關係が絶えず再生産せられ、又全勞働者階級の窮厄が永遠化せられる」のである。

（十）

都市に於ける失職若しくは無職勞働者が如何なる多數に上らうとも、それが農村より都市への流入人口數に及ばぬことは、何人も疑ふことを敢てせぬであらう。縱令機械採用の爲め人間が排斥せらるゝ個々の實例は枚擧に遑あらずとするも、全體に於て都市産業が農村人口を吸收すること斯の如く大なるの事實は、産業豫備軍は資本有機的組成の變動之を造るとの命題と餘りに明に抵觸するものである。Marx が一方に於て農民離村の著大なる事實を認めながら、他方に於て産業豫備軍は機械採用の爲めに發生すると說いて、毫も其間の調和を試みなかつたのは、了解に困しむ所である。若し調和を試みなかつたのが、農民の離村を農業上に於ける機械の採用に歸して、其必要を認めなかつたからであるならば、是に對しては明に斷言することが出來る。此觀察は事實に反すると。此點を指摘して Oppenheimer が Marx に加へた批評は最も有効なる一打擊たるを失はぬ。而して此打擊は予の見る所を以てすれば、功を奏して居る。

たゞ Oppenheimer の學說の積極的部分たる、農民の離村を大地主制度に歸するの主張に至つては、未だ遽に贊同し難きものがある。人口の都市流入が「一方的壓力減退」より起ることは固より疑を容れぬ。併し壓迫の偏輕偏重は果して大地主制度の爲めに起るか。農民離村を大地主制度に歸することは、反面より之を云へば、

離村の事實は農民總數に對する耕地全面積の不足よりは起らずと主張することを意味する。內地植民に依つて資本關係の一掃を期せんとする提案は、此認定を基礎とするものである。而して Oppenheimer は獨逸の全農業用地面積は農民一人に一ヘクタアルを與ふるものとして優に、現在農村人口の二倍を收容することが出來ると告げて居る（一九〇七年に於ける農村人口一千七百萬人、農業用地面積は戰前に於て三千二百萬ヘクタアル。猶ほ之に利用し得べき未耕地を加ふる時は之を四千萬ヘクタアルに上すことが出來るといふ。Kapitalismus usw. S. 42）。成程獨逸に於ては此通りだらう。併しこれを我邦の耕地面積六百萬町歩、農家戶數五百四十萬强、一戶當り耕地面積約一町一反に就いて見ると Oppenheimer の說の當否は甚だ疑はしくなつて來る。農家一戶を假りに五人より成るものとすれば、一人當りの面積は二反二畝である。獨逸と我邦との農耕法其他事情の相違を顧慮しても、猶ほ此數字は、田舍に於ける經濟的壓力減退の遲緩なることが土地の獨占よりは起らずして、土地の不足より起りしに非ざるかを想像せしめるものである。Oppenheimer も小自作農國に於ける離村の問題に一顧を與へてゐることはある。

併し此場合彼れは大地主制度の語を廣義に解して、佛蘭西瑞西を强いて大地主國に編入せんとするか、或は自作農國の資本主義が他の大地主國よりの流入農民に依て支持せらるゝかの如く說明しようとして居る（Grundgesetz, S. 121－2）。併し近年に於ける朝鮮人勞働者の雇傭を除けば、我國は勞働者輸出國であつて、輸入國ではない。又日本を强いて大地主國に編入しても、此日本に於て內地植民に依つて產業豫備軍の源泉を涸らさんとする提案は、上記の數字が其成功の覺束なきを豫言するものの如くである。日本の事情は Oppenheimer 反對說に有力なる材料を提供するものと信ずる。併し Oppenheimer の說の短所を詳論するには自ら別に機會があるであらう。本稿はその Marx 批評としての長所を揚げることを目的とするものである。